



橋姫 その2

が橋姫になると説明されています。しかし、橋姫の伝承はごく限られており、特に人柱と関連してもおらず、この説は納得しがたいものです。

はじめに
京都の宇治橋の橋姫については諸説があります。まずは上流から流されてきた水神の瀬織津媛命を祀ったというもので、橋姫を水の神とする最も一般的な説です。



宇治橋の「三の間」(京都府宇治市)

三の間
さて、前号では宇治橋の橋姫は、「三の間」に祀られていた、という言い伝えを紹介しましたが、それは

宇治橋の西よりの上流側に設けられた小さなテラスで、平成8年(1996)に完成した現在の橋にも再現されています。
寛政10年(1798)頃の『諸国奇遊談』によると、「三の間」の高欄には東西南北の方向を示す彫刻と、傍らに大きな鉄の環が取り付けられていたと記されています。この両者は「三の間」の付属品として踏襲されていたらしく、鉄の環は橋姫社を固定するためとも、橋姫社の水神祭の神を立てるためとも言われていました。
また同書によれば、「往来の人の立とどまるべき為ならば、中程にあるべきに、西のかたによりたるもいぶかし、又人の往来をよくするほどの小き橋にもあらず」と何の為のものか、わからないと首をひねっており、伝承をもとに想像で書いた橋姫社の建つ「三の間」の挿絵が添えられています。

名水を汲む
貞享元年(1684)の北村季吟『菟芸泥赴』には「三ノ間の水は、此川の中に此所ことに茶に甘美なりと利休おぼして、水くむ所を橋にかまへたり」として、「三の間」の張出しは名水を汲むために利休が工夫した施設だと説いています。茶の湯の世界では、「三の間」の名水が珍重されており、永禄8年(1565)や天正8年(1580)の茶会に「三の間」の水が用いられたことが記録されています。
現在でも「三の間」の下は、流れの中心であり、その水は比重が軽く、瀬田唐橋の下にある龍宮などから湧き出たものと伝えられています。

瀬田唐橋の龍宮

さて、ここで瀬田唐橋が出てきましたが、その創建は古く、『日本書紀』の天武元年(672)には文献上初出し、宇治橋および今はなき京

都の山崎橋と並んで日本三大古橋に数えられています。
また琵琶湖の南端から瀬田川が流れ出てすぐの場所に架けられており、琵琶湖と瀬田川に分断された日本の東西をつなぐ重要な橋で、古来幾度となく天下の趨勢を左右する合戦の舞台となりました。
この瀬田唐橋の橋下には、龍宮があると伝えられ、東岸には乙姫を祀る龍王宮秀郷社がありますが、これは橋姫社とも呼ばれています。ここでは龍宮信仰と橋姫が結び付けられているのです。

天正三年六月十五日、信長瀬田の橋をかくる：真中の橋杭は水底に石あり。自然と柱を建てる穴ありといふ。土俗云、勢田橋水穂の間の下は、其水底深さを知らず、直に龍宮城に通るといへり。…水底の深さを知らん爲に水練の達者を入れて水底を採知。最深しといへども、柱を建てる石ありなどと云事は偽説なり。」として、橋の中央に「水穂の間」と呼ばれる場所があったと記しています。

の「水穂の間」と同じく滲筋なのではないかと思えます。
宇治橋の「三の間」は、現在再現されているものが「三番目の欄干と四本目の欄干の間」とか、「橋の西詰から三つ目の柱間」に設けられているので、「三の間」だという具合に紹介されますが、私はかつて「水穂の間」と呼ばれたものが、「三保の間」となり、「三の間」に変化したのではないかと考えています。

一本の川

瀬田唐橋が架かる瀬田川は、琵琶湖から流れ出て京都付近で宇治橋の架かる宇治川と名を変え、その後、木津川と桂川を合流して淀川となり、大阪湾へと注ぎます。つまり瀬田唐橋も宇治橋も一本の川に架けられた橋なのです。

これに続けて、「水穂の間といへるは橋杭とはし杭との中間五間あって、第一の廣所にして急流の處なり。土俗は五間の間といふ。水穂の間といふ事は、水穂筋にして、水の流るる通なり。三保の字と心得るものは非なり。假名書なれば美保とも、水穂とも、三保とも善なるべし。然れども水穂の字正常なり。」
つまり「水穂の間」とは、川の本流で最も深い場所の橋脚間を五間(約9m)と他よりも広くとった場所のことで、滲筋にあたるようです。

三の間とは

ここで宇治橋の「三の間」を振り返ってみたいと思います。「三の間」から汲む水は名水とされることから、この水は汲んでおらず、常に澄んだ水が流れていることになりま

滲筋を示し、守る神

前号で宇治橋の橋下に住む橋姫のもとに、離宮または住吉明神という神が夜毎に通うという伝承を紹介しましたが、住吉の神は今も宇治橋の橋姫社の隣に鎮座する神であり、水運の神でもあり、船の中に祀られる船霊という神も、この住吉の神であ

ただし、中世に作成された絵巻や屏風などには「三の間」が描かれていないことから、古代から「三の間」が存在したか不明な点もあります。
また滲筋を示し、河川舟運を守る神などとはうがった考えで、単に川の本流にいる水神を祀る神だったかもしれず、瀬田川の龍宮信仰が川伝いに伝播した神だったのかもしれない。
『神道集』は橋姫がこの河川でも祀られたと記していますが、そこに固有な名が挙げられた橋はすべて淀川水系に架かる橋です。畿内の有名な大橋のみを挙げたと考えることもできますが、この史料は東国の伝承も多く紹介していることから、その他の橋名を挙げていても不思議ではないはずですが。こうしたことも踏まえて、私は橋姫とは古代の淀川水系独自の神だったのではないかと思うのです。

水穂の間

享保19年(1734)の『近江国輿地志略』には「織田軍記」に曰、



瀬田唐橋(滋賀県大津市)

川の流れの中心にあたり、瀬田唐橋

(文：江口知秀)